

## 『失われた時を求めて』に見るフォーブール・サン＝ジェルマン ゲルマント公爵夫人のモードを通して

長谷川富子

フォーブール・サン＝ジェルマンはセーヌ川左岸、ルーヴル美術館とチュイルリー公園の対岸にある。17・18世紀にはまだ牧草地だったところに、大貴族たちが競って壮麗な邸宅を建て始め、18世紀末にはヨーロッパ随一の貴族街を形成するに至った。そこから地名としてだけでなく上流社交界の最上層に位置する人々をも指す言葉として使用された<sup>1)</sup>。若き日のブルーストは1890年頃から、ジュヌヴィエーヴ・ストロース夫人やド・カイヤヴェ夫人らのサロンに出入りし、フランス貴族の名門ロベール・ド・モンテスキウ伯爵を介して、フォーブール・サン＝ジェルマンのもっとも閉鎖的なサロンを持つ貴婦人たちと知り合うことができた<sup>2)</sup>。上流社会の女主人が主催する数多くのサロンはモードを競う場でもあった。男性の黒と白の均一的な正装に対して、女性の衣装は布地、色彩、デザインの多様性と、豪華な装飾品で華美を競いあった。なかでもブルーストが憧れたグレフェール伯爵夫人は、モンテスキウ伯爵の従姉妹であり社交界で最高の美女と目されていた。初めて彼女と出会った翌日、ブルーストは彼女の神秘的な目をたたえて、「これまで出会った中で一番美しい女性」とモンテスキウに賛辞の手紙を書いている<sup>3)</sup>。当代第一の写真家ナダールが写したグレフェール夫人の肖像写真が残っているが、花の刺繍をドレスの襟元と裾に豪華に配したバウンススタイルの白いデコルテ姿は、彼女の際だった品位と衣裳の美を私たちに伝え、サロンの華やかさを容易に思い浮かべさせてくれる<sup>4)</sup>。こうした彼のサロン生活の体験は、のちに『失われた時を求めて』の貴族のゲルマント家のサロンとブルジョワのヴェルデュラン家のサロンの材料を彼に提供することになる。

『失われた時を求めて』<sup>5)</sup>は愛欲や社交生活に快楽を求める語り手が、そうした快楽が虚妄であることを身をもって体験し、芸術を唯一の真実と悟って作家へと転身する〈精神遍歴〉の物語といえる。フォーブール・サン＝ジェルマンの中でも、語り手のあこがれるゲルマント公爵夫妻は社交界の最高位に君臨し、二流、三流の貴族は容易に近づくことができない。特に、グレフェール夫人がモデルの一人とされるゲルマント公爵夫人は、その美貌、才気、センスの良い着こなして

1) 饗庭孝夫編『パリ歴史の風景』、山川出版社、1997、p.175。

2) George D. Painter, *Marcel Proust*, I, Random House, 1987, p.46.

3) *Correspondance de Marcel Proust*, Plon, 1970-93. I, p.200 (lettre à Montesquiou, 1893).

4) 『ベル・エポック ナダール写真集』、立風書房、1985。

5) *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 4vols, 1987-9. 以下、引用は括弧内に巻数と頁を記す。

スター的存在である。フォーブル・サン＝ジェルマンの粹の化身ともいべき公爵夫人をプルーストは語り手を通してどのように描いているか。特にここでは、ベスト・ドレジャーとして描かれている彼女のモードを通して、ゲルマント公爵夫人さらにはフォーブル・サン＝ジェルマンを追ってみたい。

### ・フォーブル・サン＝ジェルマンの神話

少年の頃の語り手は、神秘的な名を身にまとったゲルマント公爵夫人にあこがれる。彼の想像の中では、夫人はコンプレのサン＝チレル教会の古いタピスリー・エステルの戴冠式のモデルであり、幻灯で子供部屋に映し出されるゲルマント家の祖先のイメージ、ジュヌヴィエーヴ・ブラバンのように「メロヴィング朝時代の神秘にとりかこまれ、Guermantèsの〈antes〉というシラブルから発するオレンジ色の光の中にまるで夕日に浸されるように包まれている（I, 169）」。

遠くから垣間見る夫人は飛び出た青色の鋭い目、鳥のくちばしのような鼻、微笑するたびに鋭角を形作る薄い唇、肌のきめ細かさなど鳥を思わせる容貌に加えて、近寄りがたい神聖さ、美しさを所有している<sup>6)</sup>。これらは語り手が後に認めるゲルマント一族の特性であった。彼らは神話時代に「女神と鳥との結合」から生まれ、社交界に埋没することなく、「神聖な鳥のごとき栄光に包まれて孤高を保ってきた」のだ（II, 379）。

その後成人して、偶然にも公爵家の館の別棟に住むようになった語り手は、夫人にプラトニックな愛情を抱き、毎朝散歩する夫人を見ようと待ち伏せする。「モーヴ色のひも付き帽の下の優しいすべすべした顔」「マリブルーの小さな縁なし帽をかぶり、鳥のくちばしのような鼻を突き出した横顔」、日によって夫人の帽子や衣装は様々に変わるが、変わらないのはその聖なる鳥の特徴である。あるときの夫人はドレスも小さな縁なし帽もすべて毛皮で、もはや鳥そのものである。「自然の羽毛に包まれた彼女の小さな顔は、弯曲した鳥のくちばしを突き出しており、またその飛び出した目は刺すように鋭くて青かった（II, 361）」時として道路でヴェールやコートに素早く直す女性の日常的な仕草さえ、彼女が人間に完全に变身し、もう神であったことを思い出せない 神話の白鳥 と彼の目には映るのである（II, 329）。

ゲルマント一族が「鳥と神との神秘的結合」を最高度に見せているのは、フォーブル・サン＝ジェルマンの人々が会するオペラ座の場面である。ゲルマント家の薄暗い棧敷は神々が集まる海底の洞窟として、神秘的な世界さながらに描かれている。公爵夫人の従妹であるゲルマント大公爵夫人が棧敷から身をのり出したとき、「海に咲く白い大きな花」と見えた髪飾りは、あざやかな色艶の、ふんわりと柔らかい「大きな極楽鳥」の羽毛飾りであることが判明する。一方、公爵夫人は

6) 『饗宴』3号（1892）「\*\*\*夫人による素描」のなかで、シュヴィニエ夫人をモデルにしたイボリータは「女神と鳥から生まれた種族」と表現されている。Jean Santeuil précédé de *Les plaisirs et les jours*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, p.43. なおシュヴィニエ夫人はゲルマント公爵夫人のモデルの一人である。

全身を白のモスリンの衣裳で包んで、「女神らしい自信と威厳」を示しながら大公夫人の棧敷に入ってくる。

大公夫人の頭から首元まで下がっている見事なやわらかい鳥の羽毛や、貝と真珠をちりばめたヘアネットの代わりに、公爵夫人はその髪にたった一本の羽根飾りを挿しているだけだが、それが彼女のかぎ鼻や飛び出た目を見下ろして、まるで鳥の冠毛といった趣だった。彼女の首と肩は、モスリンの雪のような波から現れており、その波の上に白鳥の羽根の扇が揺れ動いていた。ついでそのドレスは胴部にちりばめた無数のスパンコール、棒状または粒上の金属片やブリリアントカットのダイヤモンドだけで飾られ、彼女の体にイギリス風のきりりとした輪郭を与えていた（II, 353）。

公爵夫人の装いは徹底して鳥のイマージュで包まれている。ファッション用語で丈の高い羽根飾りを指す aigrette は 冠毛、白鷺の意味がある。豊かにひだの寄せられた白いモスリンはたたまれた翼のふくらみを、胸元からすらりと伸びた首は鳥の首を、緩やかに動く白鳥の羽扇は白い翼を連想させる。

スノップのモリアンヴァル男爵夫人やカンブルメール伯爵夫人はどうかしてゲルマント一族に近づきたいという激しい願望を持っている。彼女たちの願望は、ゲルマント一族の装いの模倣となって現れている。モリアンヴァル男爵夫人は大公夫人とそっくりの装いをしているつもりでいるが、かえって「調子外れのきざで下品な感じ」を与えている。カンブルメール夫人も同様だ。

ゲルマント公爵夫人の衣装や粋を真似ようとする辛抱強く、金もかかる努力にもかかわらず、カンブルメール夫人は、霊柩車の羽根飾りのようなものを髪の中にまっすぐに突っ立たせ、しゃちこぼって味もなく、とげとげした、まるで針金で留められた田舎の女学生みたいだった（II, 354）。

聖なる鳥の種族ではないカンブルメール夫人がいくら模倣しようとしても、羽は体の一部として馴染んでくれず、滑稽さを示すだけである。作者はゲルマントの二人の女性の髪飾りを完全にコントラストさせ、大公夫人に極楽鳥の華麗なイメージを、公爵夫人に鷺と白鳥の端正なイメージを与えた。しかし二人の女性のモードがどのように異なるうとも、ゲルマント一族には、鳥と女神の結合の種族として、新興貴族やブルジョワが絶対に模倣することのできない エレガンスという天与の資質がある。二人はお互いを賞賛して眺めあう。特にスパンコールのきらめく純白をまとった公爵夫人のシンプルなエレガンスは、語り手にはまさにフォーブール・サン＝ジェルマン街の聖なる化身であったと言える。

### ・失われる神話 サロンのゲルマント夫人

父の友人の紹介で、語り手はゲルマント公爵夫妻の叔母にあたるヴィルパリジ

侯爵夫人のマチネに招かれる。ブルジョワの学者や芸術家も招かれる雑多なメンバーのサロンで格は落ちるが、初めてゲルマント一族の聖域に一歩足を踏み入れることになる。そこではゲルマント夫人は青い矢車菊の花をつけたカノチエ（堅い麦藁製帽子）をかぶり、同色のスカートをはいている。「丸い風船のようにふくらんだ青いベキンサテン地のスカート（II, 502）」がじゅうたんの上に描く丸い円は、彼には窺い知れない夫人の生活を包み込んでるように思える。更に、ヴィルパリジ夫人の夜会では、「黒い大輪のけしを浮き彫りのようにつけた黄色のサテンのロングドレス（II, 666）」を長身にまとい、威厳に満ちてゆったりと現れる。神格化された白から、青と黄に色合いを変えたとはいえ、夫人は、オレンジ色の光に包まれ、フランスの青い空をその瞳に宿すまだ神秘的な近づきがたい存在である。

やがてヴィルパリジ侯爵夫人を通して、語り手はゲルマント公爵の弟シャルリュス男爵、甥のサン＝ルー侯爵と知り合い、待望のゲルマント公爵夫妻の晩餐会に招待され、以後、ゲルマント一族と親しく話を交わすようになる。現実の夫人は彼の想像していたような神話の世界の住人でもなく、名前から由来する神秘も持っていないことに彼は失望する。想像と現実の不一致は、『失われた時を求めて』全体を流れる一つのテーマであり、それがここでも見られる。フォーブール・サン＝ジェルマンの晩餐会はこのようにつまらぬものなのか。なぜ夫人たちは「大喜びで宝石をちりばめ着飾って」やってくるのか（II, 832）。

しかし失望の中に発見の歓びもある。公爵夫人（オリヤーヌ）はゲルマント一族の出であり、ゲルマント公爵と結婚し、ゲルマント一族中のゲルマントである。オリヤーヌの才気はゲルマント一族の中でも際だっている。会話の中で辛辣な警句をはき、当意即妙の答えて切り返し、社交界の人々から拍手を浴びる。「コンプレー近郊の貴族の残忍なおてんば娘が持つエネルギーと魅力」（II, 674）を彼女は持っている。こうして語り手の内でオリヤーヌは、アントというシラブルが発するオレンジがかった色合いから深紅色へと色を変える（II, 506）。赤は血の色であり、伝統的に活力、エネルギーを象徴する色である。また勝利や残酷を意味する色でもある。画家エルスチールは夫人の本質が赤であることを見抜いたかのように、「ザリガニのように真っ赤な衣裳をつけた（II, 791）」夫人の肖像画を描いている。

1858年にウォルトによって創始されたオートクチュールは、衣服の質的贅沢に有名デザイナーによるデザインという付加価値を添えることによっていっそう高い水準の贅沢を生み出した<sup>7)</sup>。フォーブール・サン＝ジェルマン街第一のベストドレッサーとされるゲルマント公爵夫人愛好のデザイナーとして、ドゥーセ、シュリ、パカン、フォルトゥニーなど当時の実在の有名デザイナーの名があげられている。オートクチュールによる衣装の値段は一般のクチュールに比べて驚くほど高価であった。ブルーストも作中人物に「よそだったら300フランでできるのが、そんな店では2000フランもかかる（II, 254）」と言わせている。高価な衣装は飛び

7) 能沢恵子『モードの社会史』、有斐閣選書、1991、p.222。

切りの贅沢品であったが、それは富裕な階級を誇示するステータス・シンボルであり、他者との差異を際立たせる記号であった。オートクチュールを誰よりも美しく着こなす公爵夫人を、スノッパたちはその着こなしの秘密を見つけ模倣しようとして「むさぼるような目」で夫人を見つめ、夫人も見られることを意識して常に完璧であろうとしている。ある夜会に現れた夫人はルビーとマントで勝利の赤を誇らかに皆に見せつける。

目の覚めるようなティエポ口風の赤の夜会用マントを渡すとき、オリヤータは文字通り首かせのように彼女の首を取り巻いているルビーのネックレスを見せながら、自分のドレスに社交界の夫人に特有の、まるで仕立屋のように素早く、綿密で水も漏らさぬ視線を投げた（III, 61）。

なによりもフォーブール・サン＝ジェルマンの残酷さを表すのは、有名な赤い靴の挿話であろう。サン＝トゥーヴェルト侯爵夫人の晩餐会に行くために身支度をして現れたゲルマント夫人は、赤いサテンのドレス、赤い羽根の髪飾り、赤のチュールのスカーフと、「まるで血の色をした大輪の花」のようにあでやかである（II, 871）。しかし訪れていたスワンから彼の死期の近いことを知らされ、つい話し込んでしまう。友人の死よりも社交の務めを第一と考える公爵は会に遅れることに苛立ち、赤い靴に早く履き替えるよう夫人を怒鳴る。靴がドレスに調和していなくては完璧なエレガンスを誇ることができないからだ。夫人はスワンを残して赤い靴に履き替え、馬車に乗ってしまう。社交人が重要性をおくのは、人の感情、病気、死よりも、社交儀礼やエレガントであることである。赤いドレスに赤い靴をはいたゲルマント公爵夫人は、まさにフォーブール・サン＝ジェルマンの象徴である。

こうして語り手にとって、夫人はもはや他の夫人と変わることはない一人の夫人になった。しかしその昔の彼女に抱いた幻想からも、現実の彼女の美しさからも、彼女は矢張り「現実と夢想の狭間（IV, 153）」に位置する。彼は好んで彼女を訪ねては夢の世界に身を委ねる。公爵夫人が「もやのようなグレーのクレープデシンのドレスにふんわりと包まれている」のを見ると「パール・グレーの霧でほんやりかすんだ午後の終りのような雰囲気」に浸り、「赤や黄の炎の模様のついたシナ風の部屋着」を見ると「燃え上がる落日を眺める」かのようなのである。衣装はもはや夫人の体を離れて、語り手は想像空間に置かれている。

### ・ゲルマント夫人の失墜と「時」

『失われた時を求めて』の社交界は、貴族のゲルマント家とブルジョワのヴェルデュラン家を、対立する二つの核として展開する。フォーブール・サン＝ジェルマンのスターであるゲルマント公爵夫人は、その気まぐれさから、着用すべきと思われる衣装とは全く違った衣装で宝石を一つもつけずに現れたり（II, 767）見る価値のある芝居には、黒い服にごく小さな帽子をかぶり、ボックス席

の貴婦人たちから一人離れて前方の席に座るなど自由に振るまうようになる。また社交界の退屈な人々とつきあうのに飽きて、女優ラシェルや新鋭の芸術家とつきあい、面白い人、毛色の違う人を自分のサロンに迎え入れる。サロンの格付けはサロンに誰を迎えるかよりも、誰を排除するかによる。叔母のヴィルパリジ夫人と同様に、ゲルマント夫人も気まぐれと新奇な芸術への好みから自らの価値を次第に下落させ、サロンの格を落としてしまう。

一方、ブルジョワのヴェルデュラン夫人は口では貴族を「やりきれない連中 (I, 186)」とこき下ろしているが、内心は彼らから相手にされないことを恨み、彼らと同等の地位に上がることに執念を燃やす。グループの結束を乱す者を排除し、サロンの特色として芸術と知性を旗印にかかげ、画家エルスチールや音楽家ヴァントウイユをサロンに迎え、ドレフェース派であることを宣言し、優れた作家をサロンに引きつける。のちに大流行するパレー・リュスの後援者ユルベレティエフ大公夫人と親しくなり、他の誰よりも早く支援したのも彼女であった。ゲルマント夫人とは反対に、人気のパレー・リュスの公演で、一番目を引く二階正面のボックス席にユルベレティエフ大公夫人と並んですわり、見たこともない派手な羽根飾をつけて人々の注目を集めるなど、常に見られることを意識して行動する (III, 741)。芸術的スノビズムに弱い貴族夫人たちはもはや彼女を見過ごすことはできず、こうしてこれまで全く知られていなかったヴェルデュラン夫人は、貴族社交界に颯爽と登場してくる。

ヴェルデュラン夫人のモード描写はスワン夫人やゲルマント公爵夫人に比べると数少ない。彼女の「白のドレス」をサロンの客フォルシュヴィル氏が「独創的」とほめる場面 (I, 247) があるくらいだ。むしろ注目すべきは、ゲルマント一族の特性を呼び起こす鳥のイメージを、プルーストがヴェルデュラン夫人に揶揄的に与えていることであろう。「鳥が止まり木にとまる」ように、サロンで夫人は背の高いスエーデン風の椅子にちょこんと腰をかけ、「暖めた葡萄酒にその餌を浸された鳥のように」、「その鳥のような目をすっかり閉じて」客たちの話に陶然となる (I, 202)。その時々事情にあわせて、サロンに役立つ人物を引き抜く彼女の努力は「鳥の巣作り (III, 741)」にたとえられている。またスワン夫人のサロンを訪れたときのヴェルデュラン夫人は「けば立っているカイツブリの羽毛をあしらったマント (I, 591)」に暖かそうに身を包んでいる。カイツブリは背面は灰黒色、下面は白色をした水鳥である。ゲルマント夫人の高貴で神聖な白鳥には比べられないが、白い衣装や鳥のイメージは、今後、ゲルマント夫人に代わって社交界の最上階へと駆け上がっていく彼女を暗示しているようで興味深い。すなわちヴェルデュラン夫人は大戦中に夫を亡くし、戦後、デュラス公爵と再婚するが再び死別する。しかしその後、戦争で破産したゲルマント大公と再婚し、大公夫人としてついにパリの社交界の頂点を極めることになるのである。

小説の最終編『見出された時』はこのゲルマント大公夫人邸のマチネで終わっている。語り手が作家としての最終啓示を受ける重要な場面である。病気のため長い間社交界を離れていた語り手は、久しぶりに大公夫人邸を訪れる。かつて紅茶

に浸したマドレーヌの味覚からコンブレーが彼の中によみがえったように、中庭で不揃いな敷石に躓いたとき、その感覚がヴェネツィアのサン・マルコ寺院の敷石を思い出させ、忘れていたヴェネツィアがよみがえる。次々に引き起こされたこうした啓示は、現在と過去の感覚の同質性から生まれる超時間的な世界であり、語り手は知覚と想像、現実と夢想との間で芸術創造の可能性を発見する<sup>8)</sup>。

現実の流れる時間はヴェルデュラン夫人とゲルマント公爵夫人、これらの二人の女性を成功させ、失墜させるが、その時間と作者の言う「想像の超時間性」とはどのように関わり合うのだろうか。

語り手がサロンに入った時、かつてのフォーブール・サン＝ジェルマンの人々は年老いていた。ゲルマント公爵夫人も今や「宝石を背負った年老いた神聖な魚」と変貌し、「黒いレースの胸鱗」から「サーモンピンク色の肉体」をのぞかせている(IV, 505)。胸鱗 aileron はモード用語では 肩の上のごく短い袖 を指すが、翼の先端部、(ふかの) 鱗 の意味もある。フォーブール・サン＝ジェルマンの最高のサロンともいべきオペラ座で 高貴な白鳥 であった彼女も、今は年老いた神聖な魚 と代わり、黒いレースのドレスをまとっている。伝統的に、黒は喪の色であり、悲しみや死と結びつけられてきた。ジュリア・クリステヴァはこの黒いレースを「これまでとは全く違った風采 [...] 愚かさの前兆」と言い、地位を失墜したゲルマントの女にふさわしい衣装としている<sup>9)</sup>。実際、新世代の人は成り上がり的大公夫人の方を名門の貴族と思いこんでいる。流れる時間の中に棲むゲルマント公爵夫人は、作者の想像力によって白鳥から魚へとその本質的变化を示す。

この 黒い ゲルマント公爵夫人に代わって、新しい時代を象徴しているのが、サン＝トゥーヴェルト侯爵夫人の甥の息子の妻である。彼女は帝政様式のサロンでレカミエ夫人のように怠惰な姿勢で寝椅子に横たわり、「橙赤色の絹の帝政風のドレスの目を奪う華やかさ(IV, 601)」で人々の注目を集めている。1910年代には、アール・ヌーヴォーの華麗な曲線に代わって帝政風のシンプルで開放的な直線的なスタイルがリヴァイヴァルし、モードにおいてもシンプルで開放的な直線的なスタイルが流行した<sup>10)</sup>。語り手はこの若夫人のドレスから、深紅のドレスの威厳に満ちた、かつてのゲルマント公爵夫人を、その前の世代であるサン＝トゥーヴェルト侯爵夫人を、さらには帝政時代に社交界の花形であったレカミエ夫人をそこに想像する。それはまさに連続する「時」ではあるが、想像力により変わるものと変わらぬものを結びつける想像力から生まれた連続である。ゲルマントの名は残っているがその中身は代わってしまった。しかし人々は新たな想像の ゲルマント や フォーブール・サン＝ジェルマン を永遠に作り出していこう。想像力こそ人々にとっても語り手にとっても作者の言う超時間の時である「見出された時」、つまり

8) 長谷川富子「*A la recherche du temps perdu*における救済の探求とキリスト教的プラトンの図式」( )、『神戸海星女子学院大学・短期大学 研究紀要』, 25号, 1986, pp.48-55.

9) Julia Kristeva, *Le temps sensible*, Gallimard, 1994, p.78.

10) 能沢慧子『モードの社会史』, 有斐閣選書, 1991, p.161.

芸術の時間が現れてくる根なのである。

こうして語り手はさまざまな「時」の啓示によって、これから取りかかろうとする作品の中に「時」の刻印を押すことを決意して、長編『失われた時を求めて』は巻をとじる。

## 結

固有名詞フォーブール・サン＝ジェルマンはゲルマント一族を主とする上流貴族の集まりであり、爵位のように明確でなく、抽象概念であって確固とした実体を持たない存在にすぎない。ゲルマントの名と同じく、この「金色のシラブルを持つ」名前は、そこから排除されている者に、好奇心や羨望を刺激する。従ってその言葉の作用と反作用は絢爛たるモードと共に流れる時の空しさを展開する中心をなしている。ここではモードは仮面にすぎない虚飾の世界であり、むなし社交界の記号として役立っている。

一方、ブルーストはモードを彼の創造的自我が働く「時」の大切な記号として扱う。人間は時間の中で変容していき、現在の背後に計り知れぬ過去を宿している。ブルーストはこの目に見えない、とらえがたい自我の「時」を記す手段の一つとしてモードの描写を活用した。更に大切なことは、ブルーストの場合、モードは移り行く時を想像力で統合する契機となる。フォーブール・サン＝ジェルマンの最高位者であり、フランスの古い系図を持つ「ゲルマント」という神秘的な名を身にまとう公爵夫人に、語り手はあこがれ、白、黄、青、赤、グレー、黒など多彩な衣装を身につけた夫人を様々に夢想する。ロラン・バルトが『ブルーストと名前』で書くように、「固有名詞は圧縮され香りが込められている貴重品であり、花のように開かせなければならないものである<sup>11)</sup>。」ブルーストはモードを通してゲルマント公爵夫人、フォーブール・サン＝ジェルマンの名を花のように開かせ、彼独自の世界を作品に記した。彼はゲルマント夫人のモードを詳細に描くことで、ベル・エポックの華麗なフォーブール・サン＝ジェルマンの空しさを背景にしながら、ゲルマントの神話を流れる「時」と創造的自我の「時」という双方の時間を形象化することに成功していると言えよう。

(D. 1974、神戸海星女子学院大学教授)

---

11) ロラン・バルト、花輪光訳『新=批評的エッセー』、みすず書房、1977、p.81。